慶應義塾 医学部新聞
発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話番号（03）3353－1211（大代表）
信濃町駅前・各種診療

創立150年記念式典挙行

天皇皇后両陛下の御親臨を仰ぎ 総勢一万人を超える参加者のもと盛大に開催

「塾生は『独立自尊』の精神を備えた未来への先導者。慶應義塾は『未来への先導』を基本テーマに掲げ、グローバル時代に開かれた学塾として、創立百五十年記念事業を遂行している」（安西塾長）

本塾は今年で創立百五十年を迎え、十一月八日、日吉キャンパスにおいて慶應義塾創立百五十年記念式典が開催された。

天皇皇后両陛下の御親臨を仰いだほか、河村建夫内閣官房長官、白井克彦稲田大学総長、延世大学総長、復旦大学学長、ケンブリッジ大学総長代理、ハーバード大学総長指名代表など国内外の関係者が参列、式典の様子は三田・湘南藤沢キャンパスと大阪堂島リバーフォームにも中継され、参加者は総勢一万人を超えた。

式典は三部構成で、式典前プログラムでは、百周年・百一十五周年の際にも歌われた慶應義塾祝歌が斉唱され、式典冒頭では、百八十五年文部卒業生の指揮のもと、ワグネル・ソサイエティ・オーケストラ、男声合唱団、女声合唱団、混声合唱団等の合唱によって披露され、会場を沸かせた。

また創立百五十年記念事業の内容が紹介された。二〇〇六年に未来先導基金が設立されたことや、新しい教育中等教育一貫校の設立、日吉キャンパスの協生館・大阪リバーサイドキャンパスの開設などに加え、理工学部・医学部改革も紹介された。

第二部の式典はファンファーレをもって鮮やかに開式、冨田勲氏（一九五五年文学部卒業）がこの式典のために作曲し、百名を超える奏者が会場を三方から囲みながら演奏した。さらに開式の瞬間にあわせて参加者の頭上を体育会航空部の三機のグライダーが飛んだ。

今回は雨の中での開催となったが、式典の間は雨足も弱まり、安西祐一郎慶應義塾長による式辞が述べられ、つづいて天皇陛下よりおことばをいただいた。

安西塾長は式辞の中で、一五〇年の歴史を刻むことができたことを社中一致協力の賜物だとし、義塾の発展に貢献いただいてきましたすべての方々に、深く感謝申し上げます。幕末の混乱から百五十年、戦後六十年が経った今、世界は未だ、政治、経済、社会、教育、その他の面にわたって不透明の度を増しています。こうした混迷の時代を越えて、これからの世界に安定と繁栄をもたらす思索と行動を実践することが、慶應義塾の使命であります。創立百五十年を迎えるこの日、我が国は、幾多の課題に直面しており、また、国際社会において、日本が各国との協力の下に対処していかなければならない問題もなくありません。

また一般公開された慶應義塾大学病院のステージを花で飾りつけた幼稚舎代表の生徒らがつて慶應義塾長を務めたこのような状況下、教育が果たすべき役割は、誠に重要であり、今後も慶應義塾が、国の内外で活躍する人材を輩出し、送り出すことを期待しています。」と述べられた。

その他にも式典では数多くの来賓から祝辞が述べられたほか、塾生を代表して相澤宏輔君（経済学部四年）と新井麻衣君（環境情報学部四年）が誓いの言葉を述べ、大学現在研究している神経幹細胞の存在を紹介し、「社中一丸となって、創立百五十年紀の社会を担っていく人材となることを力強く宣言した。

最後を飾る第二部の未来導言では、様々な学問で活躍している塾員が紹介された。宇宙飛行士の星出彰彦氏（一九九二年理工学部卒業）、タレントイ中央銀行総裁のタリサ・ワタナガビ氏（一九七五年経済学研究科修了）がビデオメッセージで登場し、さらにジャズピニストの小川理子氏（一九八六年理工学部卒業）が大阪から中継で生演奏を披露した。

また一般公開された生徒らがステージを花で飾りつけた幼稚舎代表の生徒らが、「練習は不可能を可能にする」という言葉を引いて作った詩の朗読や、自いはまきを巻き黒い衣装に身をつつんだ普通部の生徒たちが和太鼓の迫力あふれるパフォーマンスをみせた。

大学院研究科博士課程四年の名越慈人君（医）が登場。整形外科医として脊髄損傷の治療法を探る中で、大学院研究科博士課程四年の小泉信三氏の「練習は不可能を可能にする」という言葉を引いて作った詩の朗読や、自いはまきを巻き黒い衣装に身をつつんだ普通部の生徒たちが和太鼓の迫力あふれるパフォーマンスをみせた。

天皇皇后両陛下も式典に参列

会場となった「協生館」は百五十年記念事業のひとつ

雨の中、多くの塾生・塾卒業生が出席

当日は百五十年を祝う飛行船も空を舞った

普通部の生徒たちによる和太鼓のパフォーマンス

慶應義塾百五十年にあたって ～医の本髄～

三四会　会長　比企　能樹

何をさておいても、わが慶應義塾が創立後一世紀の長きにわたり、変わることのない精神で日本の教育の牽引をなしてきたことを、三四会員御一同と共に、慶びたい思う。

百五十年前、一八五八年という年は、日本はまさに波乱万丈の世であった。TVで人気の熱血医師、福澤先生の姿が跡を継ぎに決まり、井伊直弼が大老に就任し、ハリスつ指導者が、人でも見聞したならば、混迷の日本社会は救われると思われてならない。

最近の日本の指導者と見渡せて高尚学の精神を持ち言われる人々を見るにつけ、自分の身の回りの行くべしか御家人の姿が、学問を指し、正しい指標を世に示すために慶應義塾を開かれた福澤諭吉先生という方は、なんとスケールの大きな方であろうか。もし現今のわが国に、福澤先生の何分の一でもよい、大所高所から、一つ、二つ、三つ、四つ、五つと、ハッキリと言うような人物がいたらと思う。

最近の日本社会は、何でもかも、「命」というものが実に軽くなり、世の中全体が病んでいるようにも思えるのである。

医学部においても同様に、何のために医学を学ぶのかが曖昧になっている医学部を設立されたのに違いない。

「人のために生活して己のために生活をするな」医業の本髄です。安逸を求めるのではないこと。己をすてて人を救はんこと を常に心がけ、人の生命をいのちの尊さを復治し人の患者を診療するのが医師の使命であり、唯一の生命の尊さを復治し人の患者を診療するのが医師の使命であり、唯一の生命のノーベル賞受賞者を輩出した。その受賞対象はいずれも共通して、永く腰を据えた研究努力の成果であったという。今回は三十三・六か月とのことである。ここ数年間の新件数は千件前後で推移しており、医療事故に関連した損害賠償事件は九百四十四件、平均審理期間は二